

総説論文

機能的観点からみた自閉スペクトラム症のこだわり行動の支援に関する研究動向

中村 尚生

(人間社会学部 社会福祉学科)

Research Trends in Support for Restricted and Repetitive Behaviors in Autism Spectrum Disorder: A Functional Perspective

Naoki NAKAMURA

(Faculty of Human and Social Studies Department of Social Work)

Abstract

This paper reviews previous studies on support for restricted and repetitive behaviors in autism spectrum disorder in Japan. Previous studies on restricted and repetitive behaviors in autism spectrum disorder have focused on three functions: psychological function in the development process, anxiety management, and self-sufficiency. Previous studies on support for restricted and repetitive behaviors have focused primarily on two methods: the behavioral approach, and using objects of obsession. Furthermore, developmental support was effective in reducing restricted and repetitive behaviors. It is hoped that function of restricted and repetitive behaviors, and relationship between using objects of obsession and relationship building will be clarified.

Key words

autism spectrum disorder, restricted and repetitive behaviors, function, support

要旨

本稿では、わが国における自閉スペクトラム症のこだわり行動に対する支援について、先行研究を概観した。まず、こだわり行動の機能について整理した結果、①発達過程における心理的機能、②不安に対する対処努力としての機能、③自己充足的機能が明らかとなった。次に、こだわり行動に対する支援方法について整理した結果、①行動論的アプローチ、②限局した興味関心の支援的活用に大別された。他にもこだわり行動の減弱に向け、自閉スペクトラム症児・者の全般的な発達支援も実践されていた。今後、こだわり行動が生起する場面や文脈を踏まえて、こだわり行動の機能に関する全体像や、限局した興味関心の活用のあり方と関係性構築の関連性を具体的に検討することが望まれる。

キーワード

自閉スペクトラム症、こだわり行動、機能、支援

1. 背景と目的

こだわり行動は、自閉スペクトラム症（以下、ASDと表記する）の中核的な症状の一つとして位置づけられ、限局した興味関心や常同的・反復的な行動と

いった特徴がある。ASDにおける社会性やコミュニケーションの障がいと比較すると、こだわり行動に対する支援のあり方は、あまり検討されてこなかった。その理由の一つとして、ASDのイマジネーショ

ンの障害によって、こだわり行動が起きるだけに、周囲がその行動に関して寛容になりやすいことが考えられる¹⁾。しかし、こだわり行動は社会性やコミュニケーションと比較し、改善していく割合が少ないことが指摘されており²⁾、児童期・思春期になると、強度行動障害や異常行動といった問題行動に発展する場合があると考えられている³⁾。

こだわりの本態には、質的に異なる二つの構造があると考えられている。常同行動（手をひらひらさせる、ロックンロール）、ものの反復的使用（ものを並べたり、落とすなどの行動を繰り返すこと）、自傷行動などの“低次の反復的感覚運動行動”と、同一性の保持（日課やスケジュールの変更を嫌がったり、持ち物の配置や家の様子が変わったりするといった環境の細かい変化に抵抗を示すこと）、反復的な言語（関係ない場面で、同じことを同じような言い方で繰り返すこと）、興味の限局（奇妙なものに興味を示すことや、異常な強さで興味をもつこと、ものへの普通でない愛着をもつこと）、などの“高次の同一性の保持行動”である⁴⁾。近年では、反復的感覚運動行動と、同一性保持行動、興味の限局行動という大きく3つの構造に分けられる可能性⁵⁾も報告されている。また、ASD児・者のこだわり行動のうち、反復的感覚運動行動は、知的水準に関連し、興味の限局は、知的水準に無関係であり、同一性保持行動の程度には対人コミュニケーション行動の障害の程度が介在していると考えられている⁶⁾。このように、こだわり行動の概念には変遷があり、行動上の分類基準は画一的に定まっていない。加えて、こだわり行動は知的水準や対人コミュニケーション行動の発達など、複合的な要因が関係することにより生起することが理解できる。

一方、こだわり行動に対する治療や介入にあたっては、常同行動、自傷行動、強迫行動、儀式的行動・同一性保持、限局行動の5つの構造に分け、丁寧にこだわり行動の種類と程度を把握することが推奨されている⁷⁾。つまり、ASD児・者には多様なこだわり行動があるため、こだわり行動の種類や程度を的確にアセスメントし、日常生活上の困難や懸念を見定めなければならない。実際、ASD児・者のこだわり行動は様相を変えながら生起する。例えば、家庭

や教育現場などにおいて、不安やストレスを感じている時にこだわり行動は繰り返される。頻発するこだわり行動を禁止、抑制されると、混乱に陥ったり、情緒的に不安定になったり、さらなるこだわり行動が誘発される場合がある。したがって、ASD児・者が同じようなこだわり行動を示していたとしても、その行動が個人にとって、どのような意図や機能をもっているか、理解したうえで支援のあり方を検討することが重要だと考えられる。しかし、これまでわが国におけるASD児・者のこだわり行動の機能の理解と支援について、文献的考察をおこなったものはほとんど見当たらない。またASD児・者への支援は、心理・教育・福祉などの領域で取り組まれているが、それらを取りまとめ、整理した研究も見受けられない。

そこで本論では、ASD児・者のこだわり行動の機能に関する知見を概観したうえで、こだわり行動の支援のあり方に関する国内の先行研究を検討し、こだわり行動の支援に関する現状と課題について考察することを目的とする。また本論では、先行研究にもとづき、ASD児・者のこだわり行動を常同的・反復的な行動様式から興味関心の限局性まで広範囲にわたる概念として取り扱う。

2. 方 法

国内文献は、CiNii articles (NII 学術情報ナビゲーター) を用いて検索した。「自閉症×こだわり」で論文検索をおこなったところ、1986年～2021年で125件の先行研究が抽出された。また先述したように、こだわり行動は広範囲にわたる概念であり、常同行動や反復的行動、同一性保持、限局的関心といった術語が用いられる場合がある。そこで、これらの術語も使用し論文検索をおこなった。その結果、「自閉×常同行動」で55件、「自閉×反復的行動」で19件、「自閉×同一性保持」で16件、「自閉×限局的関心」で1件の先行研究が抽出された。このことより、ASD研究では「こだわり」という用語が積極的に使用されてきたことが推察される。さらに、2013年に出版された精神障害の診断と統計マニュアル第5版(DSM-V)では「広汎性発達障害」や「アスペルガー症候群」はASDの一群として統合された。そのた

め、それらの用語も使用して論文検索をおこなったところ、44件の先行研究が抽出された。検索結果のうち、学会発表抄録や誤って検索されたもの、重複して検索されたもの、こだわりの症状に対する治療薬の効果について検討した研究などを除外し、86件を抽出した。抽出された86件の先行研究を概観し、こだわりの機能について文献的考察をおこなった。

また本論では、機能的観点からこだわり行動の支援に関する現状と課題について考察することも目的としている。したがって、本目的においては事例研究や実践研究を対象とすることが妥当だと考えられる。事例研究などの該当する先行研究を抽出するために、上述の検索結果からさらに調査研究などを除外した。その結果24件が抽出され、これらをもとにこだわり行動の支援について文献的考察をおこなった。

3. 結果と考察

3.1 こだわり行動の機能

先行研究を概観すると、こだわり行動には三つの機能があると考えられた。

一つ目は、こだわり行動が発達過程における心理的機能として表出されていることである。鬼塚⁸⁾は、子どもの心理的発達と反復的行動の関連性を次のように整理している。反復的行動は、2～4歳の間に定型発達児とASD児の両方に観察される。子どもの認知様式には、「相貌的」→「具象的」→「抽象的」という発達順序があり、具象的段階では反復的行動が表出されるが、抽象的段階へ移行すると消失または減少していく。つまり、ASD児の反復的行動は、具象性への固着という発達をつまづきとして表出される。これより、反復的行動は発達上の連続的な分布を示し、幼児の遊びの本質である繰り返しのような機能をもつと考えられている。このような遊びの繰り返しは、比較的低年齢の幼児に認められる。そして、この遊びとしての機能は、発達上、感覚的な刺激が強化子となって維持されることが多いと考えられる。加えて、反復的行動にも発達過程があり、「触覚的固執」→「常同行動」→「視覚的固執・配列」→「質問嗜好」→「儀式的行為」という順序で出現することが明らかになっている⁹⁾。このような

変化の過程は、子どもの言語能力の発達との関連が強いと示唆されている。この研究では、反復的行動の発達過程を実証的に明らかにしているが、各行動の機能の違いには言及されていない。

二つ目に、こだわり行動は外界からの刺激に対する防衛機制としての機能があると分かる。つまり、こだわりは「適応のための合理的な対処努力」と考えることもでき、一般に不安や緊張が強まるとこだわりも強まり、不安や緊張が弱まるとこだわりも弱まりやすい¹⁰⁾。また、こだわりと類似する行動として強迫があり、それらの行動には、連続性があると考えられている。例えば、こだわり行動の一つである常同行動は、感覚運動的な遊びとして体験されることもあれば、心理的な危機状態では強迫症状にもなりうる¹¹⁾。つまり、日常的に不安や緊張状態にさらされることによって、「適応のための合理的な対処努力」が続けば、強迫行動に移行する可能性があるということだ。

三つ目に、こだわり行動は自己充足的な機能があると分かる。こだわり行動は「楽しさ」や「嬉しさ」が伴い、「充実感」や「達成感」をもたらし、時として「自己肯定感」につながることも多い¹²⁾。また、広沢・柴田¹³⁾は成人に至ったASD者のこだわりの内容が、彼らが生きている社会やコミュニティの維持、発展に有益な場合があると述べている。このようなこだわりは、認知機能が発達するとともにむしろ発達を遂げながら持続する¹⁴⁾。成長とともに興味のある領域に関する知識を身につけ、「博識」と呼べる域にまで到達することがある。一方で、こだわりが自己充足的な機能をもつ場合、対象への執着や趣味などへの没入が止められないこともある。例えば、ゲームがやめられなくて就寝時間がずれて睡眠不足になり、学校や職場で居眠りをすることや、趣味のために浪費してしまい、貯蓄ができないことなどが挙げられる。このように、こだわり行動の自己充足的な機能には、不適応的状况を生じさせ、行動調整が必要になる場合もあると考えられる。

以上を踏まえると、こだわり行動には、①発達過程における心理的機能、②外界からの刺激に対する防衛機制としての機能、③自己充足的な機能があると考えられる。そして、こだわり行動には同じよう

な行動であっても、快感情の表出と捉えられるものもあれば、不快感情に対する対処方略として表出される場合もあり、多次元的な側面があると考えられた。また自己充足的な機能であっても、その程度によっては社会的不適応を生じさせる場合があることも分かった。つまり、こだわり行動の支援にあたっては、こだわりの行動上の分類よりも、その行動の背景にある ASD 児・者の目的や意図（機能）を関わり手が見極めたうえで介入することが、重要となるだろう。

3.2 機能的観点からみたこだわり行動に対する支援

本節では、24編の事例研究や実践研究をもとに、機能的観点からみたこだわり行動の支援方法を整理する。こだわり行動の支援方法は、大きく二つに分類できた。

一つ目は、行動論的アプローチである。応用行動分析¹⁵⁾をはじめとして、機能的アセスメント¹⁶⁾¹⁷⁾や、ソーシャルスキルトレーニング (SST)¹⁸⁾¹⁹⁾、トークンエコノミー法²⁰⁾、絵カード交換式コミュニケーションシステム (PECS)²¹⁾、セルフマネージメント²²⁾などの技法が用いられていた。行動論的アプローチを用いた事例のこだわり行動の背景には、主に不安や緊張に対する対処方略¹⁷⁾や、自己充足的な機能があると推測された¹⁵⁾。行動論的アプローチが用いられる事例では、こだわり行動が ASD 児・者の日常生活や心身を阻害していることが多く、その行動を直接的に消去し、代替となる望ましい行動を獲得することが重視された。そのために、こだわり行動を生起させている先行状況や結果を系統的に分析することが特徴であった。また、こだわり行動の背景に自己充足的機能があると考えられる場合、その行動は自我親和的であるため、改善しづらい。そのため、既存のこだわり行動より自己充足的機能が高く、かつ適応的な行動を形成することが必要だと考えられた。一方で、こだわり行動が不安や緊張への対処方略として機能している場合、ASD 児・者は環境把握や状況認知が十分にできず混乱している場合が多い。そのため、行動論的アプローチをおこなう際に、ASD 児・者の認知特性に対する環境調整や教授方法の工

夫が併せておこなわれる事例も散見された。例えば、環境やスケジュールの構造化 (TEACCH)¹⁶⁾²⁰⁾や、刺激統制法¹⁵⁾などが挙げられる。

以上より、行動論的アプローチではこだわり行動の消去や、代替行動の獲得および維持を目指し、新たな行動を形成することで、こだわり行動が軽減していた。これに鑑みると、ASD 児・者は特定の場面において、こだわり行動によって対応を図ることしかできない可能性も考慮すべきだと考えられる。また行動論的アプローチでは、こだわり行動を ASD 児・者の障がい特性のみに帰結させず、環境との相互作用の視点から介入することが最も強調されている。この視点は、行動論的アプローチに限らず、ASD 児・者の支援全般において取り入れられるべきである。そして、先行研究のすべての事例において、中程度から重度の知的障がいを併存しており、行動論的アプローチを選択する際に ASD 児・者の認知水準を考慮することの重要性もうかがわれた。

二つ目は、ASD 児・者のこだわり行動の一つである限局した興味関心を支援に活用するパターンである。ただし、このパターンに当てはまる事例の多くは、こだわり行動に対する介入の緊急度が相対的に低く、言語発達や対人関係に課題を抱えていると考えられた。事例ごとに限局した興味関心の活用のある方を概観すると、その方法は多種多様であった。大西ら²³⁾は、ASD 児の限局した興味をもとに小集団を編成し、自然な状況で相互交流を促し、対人コミュニケーション行動の発達支援をおこなっていた。ソーシャルスキルトレーニング (SST) では、日常生活への般化の問題が指摘されているため、上記のような方法がとられていた。支援プログラムの効果を子ども行動評価尺度 (SDQ) によって評価した結果、参加児の向社会性に変化はみられたものの、尺度得点全体には差がなかった。プログラムの実施期間や参加児の特性、限局した興味の活用のある方など、さまざまな要因からプログラムの内容を検証することが望まれる。一方、荒木²⁴⁾は ASD 児にプレイセラピーを適用し、限局した興味を介して三項関係を形成し、相手とのコミュニケーション関係を取り込んで遊びを展開できるようになった事例を報告した。事例の経過において、セラピストとの対人関

係の変化が転換点になったとの記述があったが、具体的な内容については言及されていなかった。他にも限局した興味の対象を活用し、ASD 児と関係性の構築を促進した事例は散見される²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾。しかし、各事例とも興味の限局行動の背景にある機能は異なることが推測され、その機能に応じた活用のあり方と、関係性構築の関連性を検討することが必要だと考えられる。特に、活用のあり方を検討するにあたっては、関わり手がこだわり行動の微細な違いを読み取ることの重要性が指摘されている²⁸⁾²⁹⁾。つまり、こだわり行動は同じ行為が繰り返されているわけではないため、関わり手がその行為に込められた意味を共有し、相互的なやりとりにつなげることが必要だと考えられる。

以上より、ASD 児・者のこだわり行動の一つである限局した興味は、関係性構築のための関わりへの糸口になる場合があると考えられた。また、限局した興味の対象を支援に活用することを考慮すべき状況は、次のとおりである。まず、興味の限局行動が ASD 児・者の日常生活や心身を阻害していない場合である。次に、その他のこだわり行動に対する介入の緊急度が相対的に低く、対人関係や言語発達に困り感を抱える場合である。また、興味の限局行動の背景にはさまざまな機能があり、機能ごとの活用のあり方について知見を蓄積する必要性がうかがわれた。ただ、先述したように興味の限局行動を含めたこだわり行動には、特定の場面における対応行動の固定化が生じている場合があり、行動論的アプローチによる新たな行動の獲得を支援することを考える必要があると考えられる。特に、こだわり行動の背景に自己充足的機能がある場合、自我親和的な行動となり、特定の場面と対応行動がパターン化しやすいと考えられ、他者との関係性構築やコミュニケーションを停滞させる可能性が想定される。

ここまで、こだわり行動の支援方法を二つに大別したうえで、機能的観点にもとづき先行研究を概観してきた。先述したように、こだわり行動に対する介入の緊急度が相対的に高い場合、行動論的アプローチがとられる事例が多かった。しかし、強度のこだわり行動が認められたにもかかわらず、異なる方法がとられた事例が一部あった。青木³⁰⁾は、ASD

者に強迫的な言語確認行動がみられた事例を報告した。そのこだわり行動の背景には、自我形成が関係していると指摘している。つまり、ASD 者が要求や拒否といった意思表示が困難なため、自他関係が固定化し、言語確認行動が生起していたと考察されている。また、福田³¹⁾は、長期的な視点から ASD 者の発達過程を振り返り、こだわり行動の減弱に意思表示などのコミュニケーション行動の発達が関連していたと指摘している。そして、こだわり行動が低減した理由の一つに、ASD 者の「私」が形成されたことにも言及し、青木³⁰⁾と同様に、自我形成との関連性がうかがわれた。これより、こだわり行動を機能的観点からとらえ支援的アプローチを選択するだけでなく、ASD 児・者の全般的な発達支援がこだわり行動の減弱に寄与することも示唆された。

4. ま と め

本稿では、機能的観点から ASD のこだわり行動の支援に関する先行研究を概観した。その結果、ASD のこだわり行動が同一の行動のようにみえても、その背景にある機能は異なると考えられた。こだわり行動には、①発達過程における心理的機能、②外界からの刺激に対する防衛機制としての機能、③自己充足的機能があると考えられた。また、こだわり行動は、機能的な連続性を有する可能性があり、支援方法の選択にあたっては機能的観点からこだわり行動を理解する必要があると考えられた。さらに、こだわり行動の機能は環境要因により変化すると考えられるため、環境との相互作用の視点から、行動を捉えることも重要だと考えられる。今後、こだわり行動が生起する場面や文脈を踏まえて、こだわり行動の機能に関する全体像を明らかにすることが求められる。

こだわり行動の一つである限局した興味は、支援における適用性があり、関係の接点としての役割を果たすと考えられた。しかし、支援的活用は興味の限局行動の背景にある機能を考慮したうえで判断する必要があると考えられた。今後、興味の限局行動の背景にある機能ごとに支援的活用のあり方を詳細に検討することが求められる。特に、限局した興味の支援的活用と関係性構築の関連性を具体的に明ら

かにすべきだと考えられた。関係性の構築には、情動の共有やアタッチメントといった対人的相互反応、共同注意・指差しといった非言語的コミュニケーションなど多様な要因が関係していると考えられる。ASD児・者の認知水準や特性、情緒の発達など、対象者の発達的特徴を踏まえながら、検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 内田裕之, 辻井正次 (2012) 「自閉症スペクトラムの困ったこだわり行動への対応法」『Asp heart 広汎性発達障害の明日のために』第11巻1号, 50-53頁
- 2) Piven, J., Harper, J., Palmer, P., and Arndt, S. (1996) 'Course of behavioral change in autism: A retrospective study of high-IQ adolescents and adults.' *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia* 3(2), pp.154-167.
- 3) 林恵津子 (2020) 「自閉スペクトラム症 (ASD) の情動行動」『臨床精神医学』第49巻11号, 1783-1790頁
- 4) Boldfish, J. W., Symons, F. J., Parker, D. E., & Lewis, M. H. (2000) 'Varieties of repetitive behavior in autism.' *Journal of Autism and Developmental Disabilities* 30, pp.237-243.
- 5) Lam, K. S. L., Boldfish, J. W. & Piven, J. (2008) 'Evidence for three subtypes of repetitive behavior in autism that differ in familiarity and association with other symptoms.' *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Discipline* 49(11), pp.1193-1200.
- 6) 稲田尚子 (2019) 「自閉症スペクトラム児者のこだわり行動とアセスメント」『Asp heart 広汎性発達障害の明日のために』第11巻1号, 32-36頁
- 7) Mirenda P, Smith IM, Vaillancourt T, Georgiades S, et al. (2010) 'Validating the Repetitive Behavior Scale-revised in young children with autism spectrum disorder.' *Journal of Autism and Developmental Disorders* 40(12), pp.1521-1530.
- 8) 鬼塚良太郎 (2004) 「自閉性障害における反復的行動に関する研究動向：心理学的視点からの検討と今後の課題」『九州龍谷短期大学紀要』第50巻, 77-99頁
- 9) 鬼塚良太郎 (2004) 「自閉性障害における反復的行動に関する回顧的研究：加齢に伴う変化と関連要因について」『九州龍谷短期大学紀要』第51巻, 39-63頁
- 10) 青木省三, 北野絵莉子, 村上伸治 [他] (2017) 「精神科臨床とこだわり」『臨床精神医学』第46巻8号, 953-958頁
- 11) 川崎葉子, 四宮美恵子, 三島卓穂 [他] (2015) 「自閉スペクトラム症と常同行動 (こだわり行動) について：強迫性障害との関連をどう見るか」『臨床精神医学』第44巻1号, 61-71頁
- 12) 白石雅一 (2016) 「自閉スペクトラム症のこだわりを理解し支援する」『児童心理』第70巻14号, 1103-1108頁
- 13) 広沢正孝, 柴田展人 (2017) 「自閉スペクトラム症とこだわり」『臨床精神医学』第46巻8号, 959-965頁
- 14) 本田秀夫 (2015) 「自閉スペクトラムにおける「こだわり」：経験則と生活の知恵 (子どものこだわり)」『こころの科学』第183巻, 38-43頁
- 15) 山本彩織, 須藤邦彦 (2021) 「自閉症スペクトラムのある児童へのこだわり行動の予防・減弱と自立スキルの形成：本人の要求自発機会を活かしたスキルの獲得と維持をめざして」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第51号, 127-132頁
- 16) 服巻繁, 野口幸弘, 小林重雄 (2000) 「こだわり活動を利用した自閉症青年の行動障害の改善：機能アセスメントに基づく代替行動の形成」『特殊教育研究』第37巻5号, 35-43頁
- 17) 平澤紀子, 馬場彩 (2011) 「自閉症児のこだわり行動への支援に関する研究：問題的な行動要素に関する先行条件の改善から」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第59巻2号, 225-231頁
- 18) 別府悦子, 清水章子, 谷野佳代子 (2004) 「通常学級に在籍する広汎性発達障害児の学習困難とその対応：学校と専門機関との連携を中心に」『障害者問題研究』第32巻2号, 119-130頁
- 19) 松田文春, 福森護 (2011) 「自閉的傾向のある児童生徒の「心理的安定」を目指した支援に関する考察(4)：集団学習場面における視覚的提示の方法や支援者の関わり方に焦点を当てて」『中国学園紀要』第10巻, 227-232頁
- 20) 今本繁, 門司京子 (2016) 「自閉症児に対する視覚的スケジュールと PECS (絵カード交換式コミュニケーションシステム) を用いたトイレのこだわり行動の減少とトイレ要求行動の形成」『自閉症スペクトラム研究』第12巻3号, 69-75頁
- 21) 今本繁, 稲垣暁, 野口幸弘 (2014) 「行動契約による自閉症スペクトラム青年のルール支配行動の獲得と般化」『自閉症スペクトラム研究』第13巻2号, 37-46頁
- 22) 井上暁子, 井上雅彦 (2008) 「強いこだわり行動を持つ自閉症生徒に対するセルフマネジメント手続きを応用したカウンセリング」『明和学園短期大学紀要』第18巻, 69-77頁
- 23) 大西貴子, 富井奈菜実, 中西陽 [他] (2021) 「自閉スペクトラム症のこだわりを生かした社会性促進プログラム：奈良教育大学「鉄オタ倶楽部」の開発」『日本児童青年精神医学会誌』第62巻2号, 241-258頁
- 24) 荒木穂積, 梅山佐和, 井上洋平 [他] (2004) 「高機能自閉症・アスペルガー障害児の集団活動とその教育的対応：ごっこ遊びの分析から」『障害者問題研究』第34巻4号, 275-283頁
- 25) 高橋渉 (1992) 「問題行動を肯定的に受け入れるこ

- とでコミュニケーション行動の形成を試みた一事例：年長自閉症とのかかわり」『情緒障害教育研究紀要』第11巻，51-58頁
- 26) 辻河昌登（1999）「水と唾液へのこだわり行動を続ける重度自閉症児との自閉の共有」『心理臨床学研究』第17巻1号，12-21頁
- 27) 坂中尚哉（2010）「スクールカウンセリングにおける自閉症の生徒との心理療法的関わり：こだわりを関係の窓口にして」『心理臨床学研究』第27巻6号，727-732頁
- 28) 石川秀樹（2005）「自閉症児の《反復》の意味：日常生活の儀式化のための《反復》に関する考察を中心に」『心理臨床学研究』第23巻4号，445-456頁
- 29) 牧裕夫（2015）「自閉症児の「こだわり行動」に対するプレイ体験の可能性：空想遊びからの展開と「演じきること」」『作大論集』第5巻，195-211頁
- 30) 青木和重（2007）「言語確認行動を頻発し，指示待ち行動を示した青年期自閉症者における自我の発達：自他関係の構造に注目して」『障害者問題研究』第34巻4号，267-274頁
- 31) 福田香苗，麻生武（2021）「人との関係に問題をもつ子どもたち（第107回）30歳になった自閉スペクトラム症者のMくん：こだわり行動の弱まりと環境への柔軟なかかわり」『発達』第42巻165号，86-93頁